

かたりべ137

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備日より

二〇二〇年
収蔵資料展

豊島区を走る都電



サンシャイン 60 建設中 (1977年 松井一彦氏撮影)

二〇二〇年一月二日から郷土資料館では「都電」をテーマにした収蔵資料展を行います。

かつて、東京中心部の網目のように広がる路線を運行していた都電は、自動車や地下鉄などの発達に伴い、姿を消していきました。現在では、三ノ輪橋 - 早稲田間を運行する都電荒川線(愛称・東京さくらトラム)のみとなりました。

今回の収蔵資料展では、昭和から平成にかけて都電の姿を写真に収め続けた写真家・松井一彦氏撮影・提供の写真を中心に、都電と都電を利用する人々の姿を紹介します。また、荒川線を紹介するコーナーでは、昭和から現在にかけて撮影された都電の写真や、車両を管理する荒川電車営業所(荒川車庫)内の写真、都電関連グッズなどを展示します。会期中に関連イベントも実施します。皆様のご来館をお待ちしております。(郷土 水吉雄人)

会期：二〇二〇年一月二日(金)～

二〇二〇年一月一〇日(日)

開館時間：午前九時～午後四時三〇分

入館料：無料

休館日：月曜日、第三日曜日、祝日、

一月二四日、一月二八日～一月四日



明治から令和を駆け抜ける地域の足郷土資料館では、これまで多くの方々のご協力によって、都電に関する資料を寄贈していただき、所蔵しております。当時使われていた定期券や配布された携帯用路線図、ポスターやチラシ等の資料も多くありますが、その中には、写真家の松井一彦氏によって撮影され、ご提供いただいた、都電が運行していた姿を収



池袋駅東口 (1967年 松井一彦氏撮影)



都電雑司ヶ谷付近 (1977年 松井一彦氏撮影)

めた六七一枚の写真があります。豊島区をはじめ、当時の街並みと都電を写したその写真群は、資料としての価値が高いものですが、今日まで来館者の皆様にご覧いただいていたのはその一部に留まっていました。今回の収蔵資料展では、三つのコーナーに分けて、明治から現在までの路面電車について紹介をしていきます。「Ⅰ 王電・市電の時代」では、荒川線の前身となる王子電気軌道と東京市電について戦前の記念誌等の資料からご紹介します。

「Ⅱ 都電の走るまち」では、松井氏撮影提供の写真を中心に、豊島区を走った都電の姿と、実際に使用されていた定期券や路線図、パンフレットを展示します。また、豊島区のみならず、東京タワーなどのランドマークとともに撮影された都電やごく短い期間で運行が終了したトロリーバスについても展示します。「Ⅲ そして荒川線へ」では、都電荒

川線の誕生と近年の荒川線について、写真やパンフレットなどの資料を中心に展示します。運行している荒川線の写真はもちろん、車両の整備を行う荒川電車営業所（荒川車庫）内の写真も展示いたします。実際に都電を使っていた時の記憶を思い出しながらか覧ください。

（郷土 水吉雄人）

関連イベント

●収蔵資料展記念講演会「としまの交通史」

講師：豊島区教育委員会庶務課文化財係 伊藤 暢直 学芸員
2020年12月19日（土）午後2時～午後3時30分
としま産業振興プラザ6階 第3会議室
定員30名 事前申込制
詳細は「広報としま」、区ホームページにてお知らせします。

●はんこペタペタ！パスケース用カードを作ろう！

2020年10月25日（日）午後2時～午後3時30分
としま産業振興プラザ7階 エレベーターホール
申込不要。当日開催時間内随時受付。

●展示みどころ解説

2020年11月28日（土）、12月26日（土）
各回午後2時から40分程度。
申込不要。当日郷土資料館展示室にお越しください。

●庁舎まるごとミュージアム

2020年10月1日（木）～2021年1月10日（日）
豊島区役所本庁舎3階通路 パネル展示

まるごとミュージアム紹介!

佐川美代太郎「冒頓単于」の緻密な線画



図1.「冒頓単于」扉絵原稿(小林美菜子氏所蔵)

島区ゆかりのマンガ家の作品では、横山光輝の『三国志』(『希望の友』一九七二年一月〜一九七八年七月まで連載)などが思い出されるかもしれません。

豊島区ゆかりのマンガ家・佐川美代太郎も中国の歴史やシルクロードを舞台にした作

品を描いています。代表作の三作品『汗血のシルクロード』『望郷の舞』『冒頓単于』は、ほかのどのマンガ家の作品とも違う、独特な画風が印象的です。

佐川は、『読売新聞』の投稿漫画欄「読売アンデパンダン展」への作品の掲載がきっかけとなり、マンガ家としてデビューしました。もともとは独学で作品

を描いていましたが、最初に手掛けた新聞マンガの連載が終了すると、絵の勉強をするため、絵画研究所に通いはじめます。デッサンを中心に、絵の基本をしっかりと学んだようです。後年、佐川は京都精華大学でマンガを教えることとなります

中国の歴史を題材にしたマンガ作品は、令和の時代でも大変人気がありますが、みなさんはどの作品をイメージしますか。最近の作品では映像化もされている『キングダム』(週刊ヤングジャンプ)二〇〇六年九月より連載)や、豊

が、学生たちにはいつもデッサンの大切さを説いていたといっています。

絵の勉強と並行して、一九六五年から、佐川は東洋大学大学院の聴講生として、中国哲学を学びはじめます。大学時代に学んだ老荘思想に惹かれていたため、改

めて勉強しようと考えたようです。二年後に同大学を修了すると、その翌年の一九六八年には「汗血のシルクロード」を、さらにその翌年に「望郷の舞」、「冒頓単于」を次々と発表します。この三作品は、それまでに登場したマンガ作品とは違った、類を見ない緻密で力強い線によって描かれていました。ペンで描いた細い線を、向きを変えながら多数重ねることにより、銅版画のような風合いが表現されています。同時期のほかの作家の作品では、あまり見られない手法で、すべての頁をこの手法で描いています。

「冒頓単于」は、『漫画読本』一九六九年八月号に掲載されました。舞台は紀元前二〇〇年頃のモンゴルで、「冒頓単于」とは主人公であり、実在した君主の名前です。「冒頓」が名で、「単于」は位を表



図2.「冒頓単于」原稿(小林美菜子氏所蔵)

す言葉で、君主や王という意味がありません。前漢皇帝・劉邦(高祖)との戦いを描いた作品で、図1の扉絵では、馬に乗った冒頓単于が剣を手に、モンゴルの平原を睥睨する姿で描かれています。吹き出して登場人物にセリフを語らせるのではなく、ストーリーを語る地の文に、括弧書きで人物の言葉を挿入する構成も特徴的です。佐川の独特な画風は、マンガというよりもむしろ一枚絵のような雰囲気を出しています。この作品で、佐川の画風は確立されたかに見えますが、その後も画風の変化は続きます。六〇歳を過ぎた頃からは、仏教を題材とした大型絵画や絵本を手がけ、深みのある優しい色合いと穏やかな画風へと変化していき

ました。
長女の小林美菜子さんによれば、佐川は、なにか疑問がわいたら、徹底的に調べないと気が済まず、「途中でやめるといことがどれだけ恥ずかしいことか」とよく言っていたといえます。中国哲学から始まり、仏教へと探求心のままに学び、自身の作品にその学びを反映していった様子からは、佐川の人生哲学が垣間見えるような気がします。

◆「かたりべ」二二〇号(二〇一六年七月八日発行)では、佐川の人物紹介記事を掲載しています。そちらもあわせてご覧ください。

(文学・マンガ 佐伯百々子)

「キッズデー」事業実施報告

■「イベント開催」の目的

郷土資料館のような歴史系地域博物館への来館者は、高年齢層の占める割合が大きくなる傾向がありますが、様々な年齢層に展示を楽しんでいただきたいと考えています。それは当館を通じた博物館での学習に年齢の制限はなく、博物館施設をさらに幅広く活用していただけるようにしていきたいという思いがあるからです。

そこで、当館では令和二年八月一日(土曜日)を「キッズデー」と称し、併せて子どもに向けて二種のイベントを開催することにしました。キッズデーは、年齢を問わずに当館を利用してもらうために、特に子どもや保護者がそのきっかけをつくる日です。

これらのイベントは、「区民ひろばや」広報としま」特集版・「すくすくふくろうナビ」に事前告知し、子育て支援の一助となるよう工夫しました。

■イベント①「おやこでまなぶ郷土資料館」(午前10時半から15分間程度)

小さい子どもを連れていくなかなか博物館施設に行きづらいといった声にお

応えし、未就学児とその保護者に向けて、一五分程度の解説を行ないました。展示解説をしながら、見学をする際に気をつけてほしいポイントや子どもの目線からどのように展示を楽しんでもらいたいのかといったことをお伝えする内容でした。

■イベント②「郷土資料館の子ども学芸員」(午後二時から四時)

学芸員が普段何を念頭に置いてどのように作業をしているのかを解説し、体験してもらうイベントでした。実物資料を用いた体験講座のため、イベントの対象としたのは小学五年生から中学生で、事

前予約制としました。

参加者は、学芸員による一通りの解説を聞き終えた後、展示室・収蔵庫の一部や調査・研究の現場(作業室)を見学し、次いで調査作業と展示作業を体験しました。その際に用いた資料は、「かたりべ」一三六号「巾着をにぎる熊手の酉の市」で紹介した熊手です。作業体験では、この資料にまつわる情報を、キッズデーイベントのために用意した調査カードに記入し、資料とともに展示ケースに入れ、資料名称を伝えるキャプションを添える作業を行いました。

これらの資料・調査カード・キャプションは、収蔵資料展「豊島区を走る都電」の展示準備のために休室する九月一九日まで、常設展示室の一角に展示しました。

■参加者の様子

当館は、急いで見学するのであれば、一〇分程で一巡できる小規模な施設なので、「おやこでまなぶ郷土資料館」に定刻より早く到着し、所在無げにしている親子の姿も見られました。そこで、定刻前に別途同じ内容の解説を行ないました。これはご好評いただけたようです。

「郷土資料館の子ども学芸員」では、参加する子どもの姿を動画にとっていた保護者からも質問や補足情報があり、

一緒になって体験講座へ参加していただくようでした。

なお、イベントの開催にあたっては、新型コロナウイルス感染拡大防止に細心の注意を払い、当日は密集しない参加人数で開催し、全参加者の検温・消毒等も徹底しました。

■事業の反省

キッズデーイベントの開催は当館では初めての試みでした。終了後には反省会を行ない、体験の内容や時間配分、解説のためのより平易な言葉選び等に課題が残ったことを確認しました。

学芸員にとって、来館者の反応に接することは、情報発信や展示設計の改善等を検討するときの糧となる貴重な体験です。さまざまな年齢層の来館者をどのように迎えることができるか、学芸員が考え学ぶ機会にもなりました。

(郷土 井坂綾/鄧君龍)



▲「おやこでまなぶ郷土資料館」の様子



▲「郷土資料館の子ども学芸員」の様子

連載「絵はがきは語る」(14) 番外編！染井・巢鴨の植木屋と菊見ブーム

当館では、豊島区地域を描いた浮世絵版画のうち、人気の高い八点を絵葉書にして販売しています（一枚百円）。本誌一三〇号では高田・雑司が谷地域の四点を紹介しました。今回は、巢鴨・染井地域の四点を紹介します。

江戸時代から明治末期にかけて、中山道の巢鴨や染井通り周辺（現駒込三〜七丁目付近）には植木屋が軒を連ね、一大園芸センターを形成していました。

彼らは大名や武家の庭園管理のほか、自身の庭で様々な植物を育てて販売するとともに、葉や花の変異を愛する「奇品」ブームや、趣向を凝らした作り菊を演出して「菊見」ブームを起すなど、様々な仕掛けで多くの花見客を集める園芸プロデューサーでもありました。

植木屋たちの活躍により、染井・巢鴨は江戸市中から日帰りで行ける花見の名所として知られ、引札（チラシ）や案内図、番付、双六のほか、浮世絵にも数多く描かれたのです。

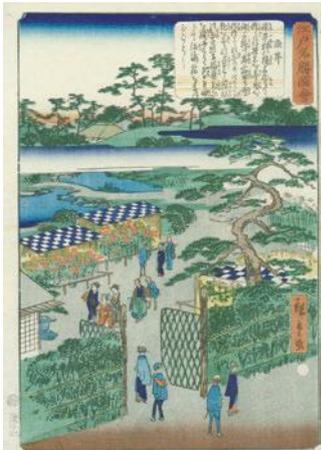
ここに紹介する浮世絵は菊見を描いたものです。江戸における菊見の流行は、文化九〜十三年（一八二二〜一六）、弘化年間（一八四四〜四七）、文久年間（一八六一〜六三）の三回あったとされ、

手法も「花壇づくり」から鳥獣や風景、縁起物などを菊花で表現する「形づくり」へと変化しました。②〜④は第二次、①は第三次ブームに版行されたものです。

①は染井、②は巢鴨の植木屋の庭を俯瞰した構図で、広い池に植木や庭石を配した庭園を巡りながら、菊花壇を楽しむ人々の様子が描かれています。

さらに②に注目すると、母親が手持つ玩具を子どもが欲しがらる姿が描かれています。これは神田祭の山車のミニチュアと思われる。江戸三大祭の一つとされる神田明神の祭礼は、かつて旧暦の九月一日（新暦の一〇月下旬）に行われ、ちようど菊の見頃でした。祭見物や寺社参詣をかねて菊見を楽しむ人々も多かったことでしょう。

③④は、小菊を用いた造り菊（菊細工）



① 江戸名勝図会 染井 二代歌川広重 元治元（一八六四年）

を描いたものです。③は巢鴨の斎田弥三郎の作で、讃に「去年富士山にて御高評を受たれば目先をかへて当年も又々富士の作り菊、御ひいき目より三國一と御評判く」とあり、白富士を背景に三羽の鶴を配した遠近感のある景色は好評を博し、以降、富士山は毎年の恒例となりました。

④は染井の植木屋金五郎の作で「ぞうの大サオ丈余いろきく見事の出来」「造花一覽園百菊」とあり、高さ三・三m余の巨大な白象の迫力に驚く女性たちの姿が印象的です。

第三次ブーム以降、菊細工の中心は染井・巢鴨から殿中、妙義坂、千駄木、藪下へと広がり、明治時代には団子坂（現文京区）の菊人形が歌舞伎を題材として人気を集め、興行化して成功しました。現在は、巢鴨地藏通りをはじめ各地で



② 東都花くらべ 巢鴨のきく 一鵬齋歌川芳藤 弘化四（一八四七年）嘉永五（一八五二年）



③ 流行菊の花揃 巢鴨植木屋弥三郎 胡蝶園（二代歌川国盛） 弘化二（一八四五年）

菊まつりが開催されますが、今年は絵葉書を手約一七〇年前の染井・巢鴨の菊見を楽しんでみてはいかがでしょう。

【参考】「菊人形今昔」団子坂に花開いた秋の風物詩」文京ふるさと歴史館、二〇〇二年。「花開く江戸の園芸」東京都江戸東京博物館、二〇〇三年。

（郷土 横山恵美）



④ 流行菊花揃 染井植木屋金五郎 一猛齋（歌川）芳虎 天保15（1844）年

作品を 見る 読む 20 佐田勝

大きな二輪のハイビスカス、瓦屋根、地上の事物がまとうアウトライン。これらの赤いトーンが鮮烈です。佐田勝（さた かつ、まさる 一九四一―一九九三）の《ハイビスカスの咲く沖繩》（図1）は、防風や日陰の役目を持つ石垣とラクギで覆われた屋敷囲いの中にあり、琉球赤瓦の屋根だけをのぞかせる伝統的な沖繩の住まいを表しています。画面はくつきりと形を作る白雲の浮かぶ青空と黄色い地面の上下に二分され、手前に生えるハイビスカス越しに遠景を眺める構図となっています。画面に集う全ての色彩が大胆でドラマティックな作品です。



（図1）佐田勝《ハイビスカスの咲く沖繩》制作年不明
油彩・カンヴァス 豊島区蔵

佐田は例えば北海道のオホーツク沿岸といった辺境の風景の題材を好んでいたようで、特に沖繩諸島には何度も足を運んでいました。彼の沖繩行きは、自由に旅行が可能となる一九七二年沖繩返還の少なくとも六年前から始まっています。



（図2）佐田勝《浜木綿咲く沖繩》制作年不明
油彩・カンヴァス 豊島区蔵

画中を大きく分割した構図、輪郭線をとおり、平塗りでより主張を強める平面性と抑揚に富んだ色彩のコントラストが佐田の画風といえますが、この特徴故に作家の風景画は空間の広がりや再現するより、個々のモチーフを浮き彫りにする向きがあります。そうした効果を心得て、佐田は風土に特有のモチーフを選択しています。《浜木綿咲く沖繩》（図2）は「輪のハイビスカス」と画面下半分を覆う白い浜木綿の向こう

側に、沖繩の島々に伝わる漁業用の木舟「サバニ」が描きこまれています。生い茂る浜木綿、山吹色の地表に置かれ黒く短い影を伸ばす焦げ茶色の小舟から、水面がなくともここが海辺だということがわかります。

長崎県に生まれ、台湾や北海道などを転々とし、中学校から東京に住むようになつた佐田は、東京美術学校（現…東京藝術大学）油畫科在学中から豊島区にアトリエを借りていました。場所は長崎と千早町のおそらく二か所です。在学中の一九三六年頃には長崎に、次いで三九年頃には豊島区千早町二一三六にいたことが山下菊二宛の書簡から推測されます*。交流は多く、美術文化協会の結成に参加し、鬚光や松本竣介など近隣に住むアトリエ村の多くの住人たちの知己を得たようです。油彩のみならずガラス絵も得意としており、一九五一年にはガラス絵協会を設立し普及に努めました。

（美術 堀口麗）

*東京文化財研究所蔵 山下菊二資料
【主要参考文献】

『日本美術』第五二号 日本美術社 一九六八年
『アトリエ』五月号 アトリエ出版社 一九六八年
『三彩』一九七八年六月号三七一 三彩社 一九七八年
『美術グラフ』七月号 時の美術社 一九七九年
『民家を知る旅 日本の民家見どころ案内』彰国社 二〇一〇年

資料寄贈受入れの
一時休止のお知らせ

収蔵資料移転及び準備作業のため
資料寄贈の受け入れを二〇二一年
夏頃まで、一時休止いたします。

編集後記

「かたりべ」一三七号をお届けします。
長い梅雨が明けた途端、八月から連日猛暑が続きました。当館では、新型コロナウイルス感染症防止策を講じつつ、八月一日に「おやこでまなぶ郷土資料館」と体験講座「郷土資料館の子ども学芸員」、八月八日に「はんこペタペタ！うちわ作り」のワークショップを開催し、いずれも好評でした。
一〇月からは収蔵資料展「豊島区を走る都電」が始まります。現在の都電荒川線にいたる路面電車の歴史を振り返るとともに、松井一彦氏撮影の貴重な都電の写真を通して、昭和三〇年代以降の都電沿線の景観の移り変わりをたどるのも、見どころの一つです。

また一〇月〜十一月には「豊島ミュージアム講座」（全四回）を開催します。郷土、美術、文学・マンガの三分野の学芸員が講師となり、日頃の調査研究の成果や所蔵作品資料の魅力をわかりやすく解説します。どうぞご期待ください。（郷土横山恵美）

かたりべ
No.137



2020年9月25日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL

<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>